

笑顔の頻度が人物の印象評価に及ぼす影響

表情表出者の性差に着目して

○藤原裕弥¹・古満伊里²

(¹安田女子大学・²広島修道大学)

キーワード：笑顔の頻度、印象評価、性差

The influence of smile frequency on evaluation of person's impression.

Yuya FUJIHARA¹ and Isato FURUMITSU²

(¹Yasuda Women's University, ²Hiroshima Shudo University)

Key Words: smile frequency, impression, sex differences

笑顔は、対人相互作用場面において、他者に対する親和性の表出機能を持つ。そのため、笑顔の印象評価に関する研究がこれまでに数多く行われており、総じて笑顔の人物は笑顔でない人物に比べて、魅力的でポジティブな印象を与えることが報告されている(e.g., 吉川, 1995; 伊師, 2011)。

近年、笑顔に関するさまざまな性差が指摘されている。例えば、女性は男性よりも笑顔をより多く表出し(Hess et al., 2000)、信頼ゲームにおいて笑顔の女性は真顔の女性に比べて信頼されやすいが、男性では差が認められない(大藪他, 2010)などの報告である。このことから、男性と女性では笑顔の与える印象が異なる可能性が考えられるため、研究1では笑顔の印象評価を実施し、その性差について検討する。

また、笑顔の印象評価は、表出量によって変化する可能性がある。笑顔表出が多い人は、そうでない人に比べて魅力的な人物、親和的な人物と評価される可能性が考えられる。先行研究においても、過度に変形させた表情を繰り返し呈示することで、その印象評価が変化すること(Rhodes et al., 2005)や、笑顔の頻度が関係性の形成過程において変化するという報告(山本・鈴木, 2008)がある。そこで、研究2では笑顔の頻度が、表情の印象評価及び人物評価に及ぼす影響について検討する。

研究 I：笑顔の印象評価における表出者の性差について検討する。

調査対象者：大学生 85 名(男性 53 名、女性 32 名；平均年齢 19.92 歳)を対象とした。調査は大学講義の受講生を対象として実施した。

表情刺激：年齢 19~23 歳の男性 8 名、女性 8 名を対象とし、同一人物の真顔と笑顔を撮影し、表情刺激とした。

質問紙：相貌印象尺度(伊師, 2011)を用いた。この尺度は、柔和性因子 7 項目、知的美感性因子 5 項目の 2 因子計 12 項目から構成されており、7 段階 SD 法で回答させた。

手続き：縦 11.2cm、横 8cm の大きさで写真(真顔・笑顔)1 枚(男女各 8 名の真顔か笑顔のどちらか一方)を回答用紙上部に配置し、その下に相貌印象尺度 12 項目を加えた質問紙を配布し、人物写真を見て形容詞対に回答するよう求めた。

結果：柔和因子の平均得点を算出し、表出者の性別(男性、女性)×表情の種類(真顔、笑顔)×評定者の性別(男性、女性)の 3 要因分散分析を行った。その結果、表出者の性別×表情の種類(真顔、笑顔)の交互作用が有意であった($F(1, 1352) = 76.18, p < .01$)。下位検定の結果、男性の真顔は女性の真顔に比べて、女性の笑顔は男性の笑顔に比べて得点が高かった。知的美感性因子においても柔和因子と同様の結果が得られた。

研究 II：笑顔の頻度が印象評価、及び人物評価に及ぼす影響について検討する。また、それらの評価過程における性差についても検討する。

参加者：大学生 54 名(男性 36 名、女性 18 名；平均年齢 20.44 歳)を対象とした。

表情刺激：研究 I で使用した顔写真の中から柔和因子、知的美感性因子の得点が高かった男女 3 名ずつの写真を使用した。質問紙：伊師(2011)の相貌印象尺度に加え、小松他(2004)の性格特性尺度を使用した。この質問項目は、活動性因子 5 項目、社会的望ましき因子 5 項目、知性因子 5 項目、個性因子 2 項目の 4 因子、計 17 項目から構成されており、7 段階 SD 法で回答させた。

手続き：最初に写真呈示セッションを行った。ここではモニタ上に 20 回同一人物の写真を呈示した。このうち笑顔が呈示される回数によって 3 条件を設定した：笑顔が全く呈示されない 0%条件、6 回呈示される 30%条件、14 回呈示される 70%条件であった。1 回の写真刺激呈示時間は 3 秒とし、写真刺激の呈示間に白い画面を 2 秒間呈示した。参加者には、人物の表情を覚えるよう偽教示を行い、写真呈示セッション終了後に呈示された人物について相貌印象尺度、性格特性尺度に回答するよう求めた。

結果：各条件における柔和因子の平均得点を求め、表出者の性別(男性、女性)×笑顔の頻度(0%, 30%, 70%)の 2 要因分散分析を行った。その結果、表出者の性別の主効果が認められ、男性の得点が高いことが示された($F(1, 48) = 8.15, p < .01$)。また、笑顔の頻度の主効果が認められ($F(2, 48) = 7.05, p < .01$)、0%条件に比べて 70%条件の得点が高かった($t(48) = 3.74, p < .05$)。同様に社会的望ましき因子の平均得点に対して同様の分析を行ったところ、表出者の性別×笑顔の頻度の交互作用が有意であった($F(2, 48) = 4.17, p < .05$)。下位検定の結果、0%条件において女性表出者に比べ男性表出者に対する得点が高いことが示された。また、女性表出者の場合に、0%条件よりも 30%条件と 70%条件の方が得点が高いことが示された 30%条件と 70%条件間に差は認められなかった(Figure 1)。

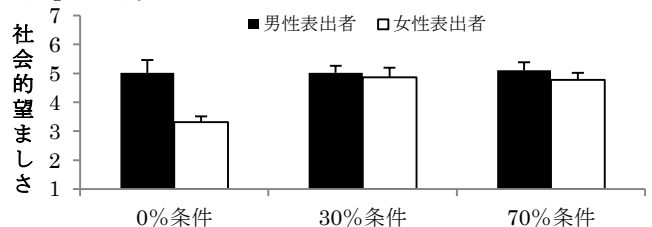


Figure 1 笑顔表出頻度条件ごとの社会的望ましき得点

総合考察：研究 I の結果から、先行研究と同様に、笑顔は魅力的な表情として評価されることが示された。また、その効果は特に女性において顕著であった。研究 II の結果から、笑顔の頻度増加に伴って柔和的な表情であると評価されることがわかった。また女性では、笑顔頻度の増加に伴い、社会的に望ましい人物と評価されることが示された。このようにいずれの研究においても笑顔表出者の性別が、観察者の印象形成に影響を及ぼす可能性が示された。